

令和元年度 第25回ICOM京都大会
令和元年9月3日(火) 於：国立京都国際会館

第25回ICOM京都大会に参加して

あつぎ郷土博物館 山岡 裕子

第25回ICOM京都大会2019が9月1日から7日の日程で行われたなかで、私は、9月3日に参加させていただきました。参加したプログラムは、セバスチャン・サルガド氏の基調講演、プレナリー・セッション：ICOM博物館定義の再考、大会決議オープン・フォーラム、二条城でのソーシャル・イベントです。

まず、セバスチャン・サルガド氏の基調講演についてです。サルガド氏はブラジル出身の写真家で、アマゾンなどの自然保全や復元のための活動をしている方としても世界的に知られている方です。

アマゾンに入り、先住民族と交流を持ち、アマゾン川流域の風景やそこで暮らす人々などの写真を撮影していますが、講演の中心はこの経験を元に話をされていました。現在アマゾンの森林破壊は急速に進んでおり、ここ数年で日本の数十倍に当たる面積の森林が消滅し、その消滅した森林の多くは、家畜用の牧草地になっています。また、近年ブラジルの大統領に就任されたジャイル・ボルソナロ氏が経済の活性化政策を推し進めており、環境問題についてはおざなりにされ、多くの森林が失われているとのことでした。また、それに伴い、西洋文化に未接触の先住民族の住居地も失われています。今回登壇したのは、この状況を訴えるためであり、「持続可能な社会」について博物館でも考えて環境破壊をする人たちにプレッシャーを与えて欲しいとのことでした。サルガド氏が撮影した画像を流しながら、地球に住む意識を持って、地球の一員として行動してもらいた

い、地球という惑星を守って欲しいとも訴えられていました。ちょうどその頃アマゾン川流域の森林火災が話題になっていた時期でニュース番組でも報道されていたので、考えさせられる講演だったと思いました。

次に、プレナリー・セッション：ICOM博物館定義の再考についてです。7人が登壇されて1人がコーディネーター、6人の方がスピーカーとして博物館の課題や未来への提言などをされました。マイノリティー(移民、LGBT)の文化をどう博物館に取り入れていくのか、人権、貧困の問題などのトピックスが挙げられているなかで、印象に残った話が、3つありました。

1つ目が、博物館がデモ行進をプロデュースしていたことです。「持続可能な社会」を実現するため、環境問題についてのデモ行進を博物館が計画、プロデュースし実行に導いたとの話がありました。本当に驚きました。日本の博物館においては、考えられないことであるとも思いました。ただ、国や地域によっては博物館に世論を動かす力があり地域の理解が得られているのではないかと思います。博物館から世界へのメッセージを積極的に発信することは今後求められることかもしれません。

2つ目は、文化の略奪が現在進行形で行われているとの話です。戦争などで持ち去られた資料は現在も返還されず、持ち去った国において研究、調査がなされている。持ち去られた国や民族には自分たちの文化でありながら研究、調査することもできない。場合によっては存在を知ることすらもできないことがあるとのことでした。そのような現状をスピーカーの方が強く訴えており、文化の略奪は歴史の遺産ではなく、現在や未来への子どもたちの知る機会を奪う大きな問題だと感じました。自国文化を他の国に広めていくことも大切であるし、それにより相互理解が深まることもあります。自国の文化が理解されて他の国に渡ることもあると思いますが、扱い方が難しいとも感じました。略奪されたケースとは違います



講演会の前の会場内の様子

が、厚木市でも、三河国田原藩の武士で画家の渡辺崋山が厚木を描いた「厚木六勝」が米国にある事が分かり今後あつぎ郷土博物館で展示したいと考えていたので、海外に持ち出された資料との向き合い方について考えさせられる話でした。

最後に、20世紀の博物館は非日常の場、普段と違う体験ができる場であったとし、21世紀の博物館は、政治的、文化的、宗教的なある種危険な話題を安全に協議や検討できる場ではないかとの話でした。戦争や闘争の原因になるような話題を安全に平和裏に解決するために博物館があると感じ、大きな使命だと思いました。

大会決議オープン・フォーラムでは、各国代表団から色々な提言がされていましたが、「持続可能な社会」という提言がありました。この言葉は1日を通じ登壇された多くの方から聞き取ることができた言葉でした。今後はこの言葉がキーワードとなり、博物館活動の核となっていくのではないかと感じました。また、今回の京都大会のテーマの「museum of cultural hub」についての提言もありました。情報が集まり、複合的な施設としての博物館を作ることが使命になっていくことだと思います。

二条城でのソーシャル・イベントですが、こちらは、夜のライトアップされた素敵な雰囲気の中、二条城の見学とそのお庭で、各国の方と交流が持てる志向となっていました。フリーの日本酒やコーヒーなどが用意されていました。

また、同時開催していた現代アートの『時を超



ソーシャル・イベント@元離宮二条城の様子

える：美の基準』展も幻想的な展示で、日本古来の伝統の美と現代的な美が融合された不思議な空間を生み出していた展示で大変面白かったです。

ただ、夜になっても京都は湿度の高い暑さで、私は長居できませんでした。

その他ミュージアム・フェアの見学をしてきました。ホールで博物館や文化活動に関わっている企業・団体がブースを出しワークショップやセミナーなども行っていました。興味深く見学させていただきましたが、VR(バーチャルリアリティ)技術を扱った企業の展示が多かった様に思いました。例えば、ヘッドセットをつけて歩くと指定の場所で目の前にある、資料の案内がされる様になっているシステムです。博物館で言うと、イヤホンガイドのVR版に当たると思います。体験したシステムでは、通常の展示では見られない資料の裏の形などが画像として目の前に表れて見ることができたり、仏像をCTスキャンした画像と実際の仏像を重ね画像が見られたりと今までにない体験ができました。耳で聞くだけより圧倒的に多くの情報量があり、今後はこういった技術を利用した博物館の展示が主流になるのではと思いました。

1日参加させていただきましたが、楽しく多くの事を学びました。特に、今後の博物館は「持続可能な社会」がテーマになっていくのではないかと考えられました。環境問題についてどう考え、どう行動するかを更に、問われる時代に入ったのではないかと考えさせられました。

参加させていただきありがとうございました。



ミュージアム・フェアの様子

令和元年度 第25回ICOM京都大会
令和元年9月2日(月)・3日(火) 於：国立京都国際会館

第25回ICOM京都大会参加記

神奈川県立近代美術館 深尾茅奈美

はじめに

第25回ICOM（国際博物館会議）京都大会が、2019年9月1日から7日にかけて開催された。ICOMは138の国と地域を代表する約44,500人の会員によって構成された博物館組織で、1948年以降3年ごとに博物館関係者同士の交流の場として国際会議を実施してきた。そして今回、世界的な博物館の動向を決定するこの会議が日本で初めて開催されたのである（1）。



開会パーティーの様子

第25回ICOM京都大会の概要

本大会では「Museums as Cultural Hubs: The Future of Tradition（文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—）」という総合テーマのもと、紛争、貧困、気候変動、自然災害といった数々の国際問題に対して、博物館がどのような行動をとっていくことができるかが討議された。

こうしたテーマが選ばれた背景には、2015年に国連で「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択されたことがある。SDGsは、地球規模のさまざまな問題の解決と平和の構築を目的とした2016年から2030年までの行動指針で、貧困、飢餓、教育、ジェンダー差別等に関する17の目標と169の具体的な達成基準から構成される（2）。博物館に社会貢献を求める風潮の高まりも相まって、SDGsの採択以降、博物館がいかにしてこの

国際目標の達成に貢献することができるかという点に関心が集まった。

このような問題意識と関連して本大会で最大の争点となったのが、博物館定義の改定である。現行の博物館定義は2007年に改正されたものであるが、博物館に期待される機能が変化するにつれ、その大幅な見直しを求める声が強まった。そして、2017年に「博物館の定義・展望・可能性委員会（MDPP）」が結成され、京都大会で新定義を採択するための準備が進められてきたのだ（3）。

本稿では、SDGsと博物館の関わり、ならびに博物館定義の改定という京都大会の核を成す二つのテーマに注目し、私が参加したプログラムの中から特にこれらのテーマと関わりの深いものを取り上げ、その内容を紹介する。

隈研吾氏とセバスチャン・サルガド氏による基調講演

博物館関係者や大学教授が登壇したプレナリー・セッションとは対照的に、基調講演では、建築家や写真家といった他分野の専門家が発表を行い、各々の立場から新たな時代の博物館像や持続可能な世界の構築について論じた。

「森の時代」と題した発表を行った建築家の隈研吾氏は、21世紀における博物館の在り方について語った。隈氏の言葉を借りれば、これからの博物館は「ハコモノ」として批判されてきたこれまでの在り方を脱し、「森のように」開かれた温かい空間を目指さねばならない。つまり、博物館は地域住民の交流・教育の場として機能するとともに、地域経済の活性化に貢献することが求められるのだ。隈氏自身、建築を通してこうした理念を実現してきた。栃木県的那珂川町馬頭広重美術館では、建設用資材に地元の木材を使用し、地元住民の参加意識を高め、地域経済の活性化に寄与している。また、東京五輪のメイン会場となる新国立競技場では、47都道府県で採取した木材を使用するとともに、スタジアムに遊歩道を併設するなど、地域住民に開かれた空間になるよう工夫

が施されているのである。

一方、写真家のセバスチャン・サルガド氏は「アマゾンの熱帯雨林保護」と題した発表のなかで、自身の活動を紹介しながら、アマゾンにおける森林保全と先住民保護の重要性を聴衆に訴えた。アマゾンの豊かな自然は、地球上の生態系をつかさどる重要な役割を果たしており、現在もこの地には約35万人の先住民が暮らしている。しかしながら、近年、ブラジル大統領の指揮によりアマゾンの開発が進み、森林保全と先住民の保護は喫緊の課題になっているのだ。これらの問題を前に、サルガド氏はその自然環境や先住民の姿をおさめた写真集を発表し、アマゾンの素晴らしさを広く社会に発信してきた。こうした活動報告につづいて、講演の終盤にはクラシック音楽とともにサルガド氏による150点の写真作品が上映された。



セバスチャン・サルガド氏による基調講演

プレナリー・セッション「博物館による持続可能な未来の共創」

「ICOM持続可能性ワーキンググループ(WGS)委員会」委員長のモリアン・リース氏が冒頭で述べたように、本パネル・セッションの目的は、博物館がいかにしてSDGsの達成に貢献することができるかという問いに一定の見通しをもたらすことであった。

最初に議論の俎上に上がったのは、気候・環境問題である。日本科学未来館館長の毛利衛氏は未来館がSDGsと軌を一にした目標を掲げていること、2017年に同館でSDGsについて討議する「世界科学サミット」を開催したことを報告した。毛利氏によれば、人類は様々なつながりの中で生きる宇宙の一要素に過ぎず、人類の存続のためには

地球規模の視点を導入していくことが不可欠だという。また、We Are Still In実行委員会委員のサラ・サットン氏は、海洋ごみを用いた作品を展示したフィレンツェ・グリスウォルド博物館等の例を挙げながら、博物館がSDGsに則した取り組みを行うことの重要性を訴え、さらにパリ協定を支援するWe Are Still Inの活動報告を行った。他方、気候変動を専門とする世界初の博物館、競馬会気候変動博物館の館長を務めるセシリア・ラム氏は、SDGsに基づく同館の取り組みとして、気候変動に関する理解を深めてもらうための教育普及活動を行っていることを紹介した。

次に、人種差別や社会的不平等の問題が取り上げられた。ポニータ・ベネット氏が館長を務めるディストリクト・シックス博物館は、アパルトヘイト政策によって分断された地域文化を再生することを使命としている。というのも、ケープタウンに位置するディストリクト・シックスは、アパルトヘイト政策期に非白人を強制退去させた地区であったのだ。ベネット氏はこうした歴史的経緯を説明し、同館がその使命を達成するべく、薬草の使用法をはじめ、この地域で口承されてきた知識を共有するためのワークショップを開催していることを報告した。

そして最後に、Curating Tomorrowの創設者であるヘンリー・マギー氏が、他の登壇者からの事例報告を総括する形で、より俯瞰的な視点からSDGsに則した博物館活動の枠組みを提示した。そのなかでマギー氏は、SDGsが文化、自然いずれを扱う博物館にも関わるものであると指摘し、SDGsの達成に貢献しうる博物館活動として、自然遺産および文化遺産の保護、学習機会の提供、文化のアクセシビリティ向上、外部組織との連携等を提案した。

プレナリー・セッション「ICOM博物館定義の再考」

「ICOM博物館定義の再考」は本大会で最も注目を集めていたプログラムであったと言っても過言でない。まず「博物館の定義・展望・可能性委員会(MDPP)」委員長のジェット・スタンダー氏より、博物館定義の改定を巡る経緯の説明があった。それによると、今回の再定義案の募集では、69の国から269個の再定義案が集まり、MDPP委員会がそれらを吟味して5つの案を提出したという。最終的な再定義案の採決は9月7日

の臨時総会で行われることが予定されており、パネル・セッションはその前段階として実施された。

一人目の登壇者であるアメリカンウェスト・オートリー博物館館長のリチャード・ウェスト氏は、認識論の観点から21世紀におけるパラダイムシフトについて論じた。ウェスト氏によれば、これまでの博物館が文化と自然、歴史と芸術といった二元論的な思想に基づいていたのに対し、21世紀の博物館は、線引きのない全体論的な世界観のなかで異文化間の対話を生み出すことが求められるという。一方、環境学を専門とするニーマル・キッシュナニ氏は、二元論の解体によって実現した新たな都市設計に注目した。具体的には、ムンバイ（インド）のグリーンビルディングやホーチミン（ベトナム）の農業幼稚園等を例示しながら、アジアの諸都市で自然と人工物を融合する動きが強まっていることを紹介した。

その後、博物館における脱植民地主義へと議題が移った。オケロ・アブング世界遺産コンサルタントのCEOを務めるアブング氏は、今日もなお西側のキュレーターが資料を占有しその解釈を決定するという不均衡な構造が残存していることを指摘し、コレクションの返還と中立的なキュレーションが不可欠であることを強調した。また、ケープタウン大学教授のショーシー・ケッシ氏は、2015年に同大学から植民地主義を代表するセシル・ジョン・ロデストとサラ・バートマンの彫刻が撤去されたことを報告し、パブリックアートが脱植民地主義のための集団意識形成に大きな影響力を持つことを主張した。

最後のテーマに取り上げられたのは、博物館と地域社会との連携である。メルボルン大学旧財務省ビル博物館館長のマーガレット・アンダーソン氏は、博物館が「力強いストーリーテラー」であるとしたうえで、社会のなかの多様な声を拾い、コミュニティとの連携のなかで社会正義に貢献することに博物館の使命を見出した。また、コスタリカ大学教授のローラン・ボニラ・マーチャヴ氏も、博物館がさまざまな社会問題に関する対話を促す場所として機能すべきとの主張を展開し、地域社会と連携した取り組みを行うアバンガレスの鉱山エコミュージアム等の事例を紹介した。

むすびにかえて

閉会后、ニュースの報道を通じて9月7日の臨

時総会で博物館定義の採択が延期されたことを知った。とはいえ、京都大会がこれからの博物館像を考える上で非常に重要な機会となったことは疑う余地がない。現時点でまだ言語化できる段階に達していないとしても、大会を通して参加者たちが思い描いていた博物館像は、共通の輪郭を得ていたように思う。

また、私個人の感想としては、世界各国の博物館における多様な実践例を伺うなかで、キュレーションという行為がもつある種の「暴力性」と可能性に改めて気づかされた。キュレーションはその性質上、一方的な解釈の発信に陥る危険性をはらみ、それを対話の場所に変えることができるかどうか、平和の構築へとつなげていくことができるかどうかは、学芸員次第である。その責任の重さを痛感し、身の引き締まる思いがした。

最後に、第25回ICOM京都大会への参加に際してご支援くださった神奈川県博物館協会に感謝の意を表す。



プレナリー・セッション「ICOM博物館定義の再考」

註

- (1) ICOMの沿革と概要については、本大会で配布されたプログラム冊子を参照。「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—」(ICOM、2019年9月発行)
- (2) SDGsの詳細については国連開発計画駐日代表事務所ホームページを参照されたい。
<https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/sustainable-development-goals.html> (最終アクセス:2019/11/29)
- (3) 定義の改定を巡る経緯については以下に詳しい。Jette Sandahl, "The Museum Definition as the Backbone of ICOM," *The Museum Definition: the Backbone of Museums*, London, pp. 1-9.

令和元年度 第25回ICOM京都大会
令和元年9月3日(火)・4日(水) 於：国立京都国際会館

ICOM京都大会参加報告

横浜ユーラシア文化館 主任学芸員 高橋 健

2019年9月のICOM京都大会に、神奈川県博物館協会より派遣されて参加する機会を得た。報告者の参加目的は、①今回の大会で議題として掲げられた博物館定義の再考についての議論を聴講し、博物館の果たすべき役割についての世界的な潮流を学ぶこと、②歴史考古系博物館に関わる国際委員会のセッションに参加し、各国の博物館の課題や取り組み事例を知ること、であった。120か国から4,590人が参加したという、報告者にとっては初めてとなる規模の国際会議であったため、運営についての感想も含めてご報告したい。

メイン会場である京都国際会館では、基本的に午前中にプレナリーセッションと基調講演が行われ、午後にはプレナリーセッションと並行して大小の会議室で各国際委員会のセッションが開催されていた。ICOMには多数の国際委員会があり、各々がセッションを開催するため、別会場の稲盛記念会館（地下鉄で2駅、シャトルバス運行）も使用されていた。メインホールは最大2,000人収容で報告者が通常参加する学会とは隔絶した規模であったが、国際委員会のセッションは数十人、合同セッションが百数十人程度収容の部屋で実施されており、普通の学会と同規模であった。

日本人参加者は1,866人で史上最多ということであったが、会場では海外からの参加者が多いと感じられた。特に中国、台湾など東アジアからの参加者の姿が目立ち、発表だけではなく、ミュージアムフェアにおいても力が入ったデモンストレーションを行っていた。

プレナリーセッション「博物館定義の再考」

9月3日午前のプレナリーセッションでは、「博物館定義の再考」が論じられた。今回の会議は、ICOM規約における博物館の定義が45年ぶりに大幅改正されるということで、注目を集めていたのはご承知の通りである。新しい定義案は、従来の博物館の定義と比べ、対話の場という側面を強く打ち出したものとなっている。

【定義案】（報道等を参考に改訳）

博物館は、過去と未来についての批判的対話を行うための場所であり、民主化をうながす、包摂的な、多くの意見が交わされる場所である。博物館は、現在紛争や課題が存在することを認識し、それらに取り組みながら、社会から託された作品や標本を保持し、将来の世代のために多様な記憶を守り、全ての人々に遺産への平等な権利と平等な利用を保証する。

博物館は、営利を目的としない。博物館は、参加型で透明性があり、多様なコミュニティと連携して、またそれらのために、収集、保存、研究、解釈、展示を行う。こうした活動を通じて、世界についての理解を向上させ、人間の尊厳と社会正義、グローバルな平等と地球全体の幸福に寄与することを旨とする。

モデレーターによる問題提起では、会場である京都に結び付ける形で西洋的な二元論的思想の行き詰まりが指摘され、そこからの脱却への期待が述べられた。続いて6人のスピーカーが登壇した。それぞれ10分程度という非常に短い時間でのスピーチだったが、全体を通じて印象に残ったのは、植民地主義と先住民、気候変動と環境問題、貧困と社会の分断といった現代の国際社会が直面している問題に対して、博物館がどう立ち向かうべきか、という問題意識の強さだった。私自身は、日常的な博物館業務の中で博物館のミッションをこうしたグローバルな社会問題と直結させる視点を持っていなかったため、自分自身の博物館に対する見方の狭さを痛感せざるをえなかった。一番印象に残っているのは、考古学者でケニア国立博物館の元館長であるGeorge Okello Abungu氏によるスピーチである。内容は旧植民地への文化財返還問題に関するもので、当事者からの痛切な訴えには「旧宗主国の博物館において文化財が保存公開されてきたという側面もある」といった傍観者的な論評を許さない迫力があつた。



プレナリーセッション「博物館定義の再考」

セッションの最後に会場から二人のコメントがあったが、個別のスピーチに関してのものではなく、新しい博物館定義の採択についてであった。一人はワーキンググループによるこれまでの作業に敬意を表しつつ、議論が不足しているとして採択の延期を求めたのに対し、もう一人はそうした要望に理解を示しつつも、「こうした議論において『十分に議論を尽した』という時は来ないのではないか」として今大会での採択を求めた。どちらのコメントに対しても会場からは多くの拍手が起り、意見が割れていることをうかがわせた。報告者は同日午後開催されたラウンドテーブルにおける討論には参加しなかったが、最終日に行われた投票では結果として前者の意見が多数を占め、今大会での採択には至らなかったのは報道等でご承知の通りである。

国際委員会によるセッション (ICMAH)

ICOMには30の国際委員会が組織されており、それぞれが単独ないし合同でセッションを開催していた。冊子体のプログラムは通し券の参加者のみ配布されたため、報告者を含む一日券による参加者は、Webで提供されたpdf版やスマホアプリを利用した。全体プログラムには個別の発表についての情報（発表者やタイトル、発表順）は掲

載されておらず、それぞれの国際委員会のHPにアクセスして情報収集する必要があった。国際委員会によって情報更新の頻度にばらつきがあり、事前に各セッションの具体的な内容を把握することはやや困難であった。

報告者は、3日午後ICMAH（考古学・歴史の博物館・コレクションの国際委員会）のセッションに参加した他、4日午後AVICOM（オーディオビジュアル及び映像・音響新技術国際委員会）その他のセッションを聴講した。ここでは、ICMAHで印象に残った発表を取り上げたい。

今回の京都大会のテーマは「文化をつなぐミュージアム—伝統を未来へ—」であった。個々の発表の中でも文化的ハブとしての博物館という役割が強調されることが多かったが、中でも印象的だったのが、エジプトのAhmed Ellaithy氏によるものだった。エジプトのマラウィ国立博物館は、2013年8月に政治的対立に端を発する暴動の中で、大規模な略奪を受けて破壊された。暴徒によって資料のほとんどが略奪ないし破壊されたというニュースは記憶していたが、その後の展開は寡聞にして知らなかった。略奪された資料の多くは回収され（当局により恩赦が実施されたという）、博物館は2016年9月に再開している。この再オープンにあたっては、単に警備を強化するといった方向ではなく、博物館の教育機能やコミュニティとの関係構築に力が注がれ、人々をつなぐ場としての役割が重視されている。多様な関心をもつ人々を取り込む必要性は、もちろん日本の多くの博物館においても常に意識されていることだと思うが、暴徒化した地域住民による襲撃という衝撃的な経験を経て、コミュニティとの日常的な関係の構築こそが大切であるという結論に至った点は、極めて興味深かった。

セネガルのAbdoulaye Camara氏による発表は、プレナリーセッションでのAbungu氏のスピーチと同様、旧植民地への文化財返還に関するものであった。この発表では、フランスのマクロン大統領によるアフリカへの文化財返還政策と2018年のダカールにおける黒人文明博物館 (Musée des civilisations noires) の開館という二つの出来事が取り上げられた。残念ながらいづれも日本における報道での扱いは大きくなかったように思うが、旧植民地への文化財返還問題が新しい段階に入ったことを実感させられた。

このほか、日本の事例も含めて、さまざまな博物館の取り組みは参考になる部分が多かった。オランダのRoeland Paardekooper氏は、野外考古博物館が現代社会で果たす役割と、野外博物館や実験考古学に関する国際的なネットワークであるEXARCについて発表した。EXARCへの日本からの参加も呼びかけていたので、関心のある方はぜひHPをご覧ください。

これらの発表は基本的には英語で行われ、プレナリーセッションが行われたメインホールにおいては四か国語による同時通訳が提供されていた。合同セッション等が行われていた大教室においては英語→日本語の同時通訳が提供されていたようだが、小規模なセッションでは通訳が置かれていなかった。ただし、英語を母国語としない発表者が多数を占めており、パワーポイントによって情報を補うことも可能なので、聞き取り能力はそれほど高いものが要求されるわけではない。報告者の聴講した範囲では、英語以外の発表が行われたのは、フランス語による一例だけだった。またメインホールでは、同時通訳とは別に、スクリーンに発言内容の書き起こしと逐語訳が表示されていた。後日確認したところでは、これはヤマハ株式会社による字幕・翻訳サポートアプリ「おもてなしガイド」を使用したものであった。実は全てのセッションでこの機能が提供されており、スマホで利用できたらしいが、現地では気づいていなかったため、確認することはできなかった。

その他のイベント等

ミュージアムフェアでは、国内外の各種企業・団体のブースが軒を連ねていた。日本からの参加団体では、VR関係や防震技術などのデモが注目を集めていたようである。VRや複製展示に関しては、超高精細な品質をアピールするためか、同種の文化財が取り上げられる傾向があったのがやや残念であった。この中で東大阪市教育委員会のバーチャル博物館は、必ずしも国宝級の素材でなくても見せ方次第で第一級のコンテンツとなることを示しており、大変参考となるものであった。

3日夜には二条城でのソーシャルイベントが実施された。2017年の「学芸員はがん」発言に関連して二条城の文化財活用が話題となった経緯もあり、MICE事業における文化財活用の実態を知りたいと思って参加した。大会終了後の19時か

ら21時まで、国宝・二の丸御殿の見学、台所でのインスタレーションの展示が行われ、休憩所付近で飲料と弁当が提供されていた。この日のソーシャルイベントは一か所のみ開催だったため、数千人の参加者が二条城に集結する状況となり、混雑は相当なものだった。全員が博物館関係者であるため大きなトラブルは起こらないだろうという安心感はあったが、運営側としてはここまでの混雑は予想外だったのかもしれない。



二条城におけるソーシャルイベント

京都府立京都学・歴史館において開催されていた「みゆげコット2019 in京都」では、さまざまなミュージアムグッズや古墳グッズが販売されていた。主に関西で活動する2つの博物館団体と、高槻市の古墳フェス「はにコット」による合同イベントである。他にも同種の販売イベントはあるが、歴史・考古に特化している点、博物館と愛好家が並んで出展している点がこのイベントの特徴だといえる。はにコット実行委員長のインタビューを聞くことができたが、行政の肝いりではなく、完全に一般市民の手で立ち上げ、運営している点に感銘を受けた。

おわりに

今回の参加で多くの刺激を受けることができたが、やはり基本的に受け身の立場であり、自らも発表して意見交換をしたかったという感想を抱いた。県内博物館の若手学芸員の皆さんは、今後同様の機会があればぜひ積極的に対外発信していただければと思う。